

「地球市民教育」を目指す日本語教育の試み

—「上級2 話し方・聴解」コース、インタビュー・プロジェクトの報告—

黒川 美紀子

【要旨】

本稿は「上級2 話し方・聴解」コースにおいて、地球市民教育を目指す日本語教育の試みとして行ったインタビュー・プロジェクトの実践報告である。まず、その実践の基本的理念となった「地球市民教育としての日本語教育」という概念について紹介し、今後日本語教育が目指すべき方向性について述べる。上級2は学生たちにとってこれまでの日本語学習の総決算的な意味合いを持ったコースであり、筆者は、このインタビュー・プロジェクトに、「初対面の人に待遇表現を用いてインタビューする」「地球規模の問題について様々な角度から深く考えるためにインタビューする」という二つの目標を設定した。具体的には、南北問題を解決するための取り組みの一つである「フェア・トレード」をコースの統一テーマに、学生たちはそれぞれが設定した小テーマを明らかにするためのインタビュー・プロジェクトに取り組んだ。本稿では、その一連の活動を、段階を追って詳細に報告する。さらに、プロジェクト終了後に実施した学生たちへのアンケートを分析し、最後にこの実践が示唆することと今後の課題について論じる。

【キーワード】

人間主義 地球市民教育 インタビュー・プロジェクト フェア・トレード 話し方

1. はじめに

ICU日本語教育課程（以下JLP）では、日本語を母語としない学生たちのために、初級3レベル、中級3レベル、上級2レベル、合計8レベルのコースを開講している。ただし、卒業要件として必須とされているのは上級1までであり、上級2はそれを終えてもなお日本語を学びたいという学生のための選択コースである。初級、中級段階ではレベル別の総合的なコースであるが、上級からはスキル別に独立したコース編成となっており、学習者は個々人のニーズや履修計画に従って必要なコースから先に取り組むことができる。上級1では「読解」「書き方」「聴解」「話し方」と四つのコースに分かれていたスキルを、上級2では「話し方・聴解」「読解・討論」「書き方・プレゼンテーション」というように二つずつ組み合わせて3種類のコースとし、これまでに習得したスキルを複合的、総合的に用いてより実践的な学習ができるように工夫されている。筆者は2005年度春学期にこの3コースのうち「上級日本語2 話し方・聴解」（以下、上級2AO）を担当した。

本稿は、このコースにおいて、地球市民教育を目指す試みとして行ったインタビュー・プロジェクトの実践報告である。以下、第2章では、その実践の基本的理念となった「地球市民教育としての日本語教育」について述べ、次章から具体的な実践について報告する。第3章ではコースの概要、続いて第4章でインタビュー・プロジェクトの概要を説明し、第5章では、プロジェク

トの各段階での学生たちの取り組みについて報告する。第6章では、プロジェクト実施後に行った学生たちへのアンケートを分析し、最終章で今回の実践が示唆することと今後の課題について述べる。

2. 地球市民教育としての日本語教育

岡崎・西口・山田(2003)は、これからの日本語教育に求める視点として「人間主義」を掲げている。人間主義とは、日本語教育の世界だけにとどまらず、人の価値観・世界観・生き方に関係するものであり、現代社会で次から次へと起こる問題に向き合い「人間にとっての幸福とは何かを日常生活の中で模索し、そして教育現場における理想を少しでも実現して」(p.4) いくことを目指す概念である。山田(2003)は、具体的には、日本語教育に「多文化教育」と「地球市民教育」としての役割を期待している。山田にとって教育とは「何らかの意味で『今の自分を変える』ことに貢献すべきもの」(p.33)であり、その中には「世界の見方」を変えることが含まれている。ここでいう「多文化教育」とは、「お互いの違いを尊重して、相手の立場に立って、…」といった牧歌的な「多文化共生」観を超えて、現状の社会を作り上げている多種多様で複雑な社会的力関係の文脈を一つ一つ読み取り、人種や民族の違いだけでなく、ジェンダー、障害の有無、宗教・心情の違いなどまで幅広く含めた「文化」の多様性を肯定的に受け止め、多文化の共生を目指して自己変容するとともに、地域や企業など自らが所属する社会をも変革する意志と能力を開発していく教育である。一方、「地球市民教育」とは、環境問題や民族問題など地球規模で取り組まなければならない課題に対し、「地球規模で人が生きていくことを考え、地球規模で起こっている力関係の問題をとらえ、それらに対応するための能力を育む教育」(p.39)であり、「国家や文化を超えて行われる、あるいは国家や文化を超えるために行われる教育」(p.39)である外国語教育、第二言語教育であるからこそ多大の貢献が期待できると述べている。

こうした考え方の背景には、ブラジルの教育学者パウロ・フレイレの教育学が影響を与えているものと考えられる。野元(2001)は、フレイレが『被抑圧者の教育学』(Freire 1974)で提起した「課題提起型教育」を紹介しながら、「『日本語を学ぶこと』が『人間らしく生きること』につながる人間化のための日本語教育でなければならない」と述べている。ここでは特に地域に住む外国人住民を対象とした日本語教育の場が取り上げられており、彼らが抱える「差別」や「労働災害」「健康不安」など生活上の課題や困難、彼らが暮らす地域の課題に向き合い、こうした問題を解決していく力を身につけることを可能にする教育実践の体系化を求めている。筆者もまた、こうした実践の意義を強く感じているが、それと同時に、人間はだれでも被抑圧者にも抑圧者にもなり得るのだという複眼的な人間観を持つことが重要なのではないかと考えている。

留学生は、外国人という立場においてはマイノリティーであり、弱者ということも可能である。単なる言葉の習得にとどまらず、彼らが日本社会で直面する諸問題に立ち向かうことのできる力を育てることも、我々日本語教育に携わる者の使命であろう。しかし、留学生は弱者であるという事実の一方で、数年前に大きな反響を呼んだ『世界がもし100人の村だったら』という絵本に従えば、大学教育を受けられる彼らは100人の村人のうちたった一人の恵まれた存在ということになる。その中でも海外留学までできるのは、さらに一握りの幸運な村人であろう。それゆえ、

彼らには、自らが学んでいる知識や能力を残り 99 人の村人が幸せに暮らせる世界を築くために用いる義務があると考えます。そのきっかけになるような学びの機会を生み出したい、言い換えれば、「地球市民教育としての日本語教育」の試みを上級 2 AO で実践してみたいと考えた。

3. コースの概要

上級 2 AO は冬学期と春学期にのみ開講され、単位数は 2 単位である。2005 年度春学期は、月曜日と金曜日の 3 時限に週 2 コマ（1 コマは 70 分）として開講され、期末試験期間を除くと正味 10 週間の間に計 17 コマの授業が行われた。

上級 2 AO のコース目標は、「専門的な番組を見て理解できるようになり、そこから語彙や表現の幅を広げる。また、自分が決めたテーマについて、適当な形でインタビューができること、見たり聞いたりしたものについて口頭で報告し、そこから建設的な議論ができること」（中村・坪根 2004, p.68）とされている。この目標を達成するために、上級 2 AO には二つの大きな柱がある。一つは「ビデオ・プロジェクト」であり、もう一つは「インタビュー・プロジェクト」である。ビデオ・プロジェクトでは、各自リストの中からビデオを 1 本選び、語彙表だけを頼りに学期末までに自力でビデオを視聴することが求められる。そして、期末試験期間中に内容要約、理解確認のための質疑応答、ビデオを見ての感想や意見を述べる口頭試験が行われる。この課題を達成する力を養成するために、クラス内ではニュースやドキュメンタリー、ドラマ、報道番組などを全体で視聴し、内容の確認や要約練習、ディスカッション等を行っている。一方、インタビュー・プロジェクトとは、学生たちがそれぞれ興味のあるテーマを設定し、それに適した方法でインタビューを実施、結果を分析・考察して学期末にクラスで発表するというものである。本稿で報告する「地球市民教育としての日本語教育」の実践は、このインタビュー・プロジェクトの活動の中で行われた。

なお、コース受講学生の背景およびコースの評価方法は以下のとおりである。

<学生内訳>

男女別： 男性 2、女性 4

国籍別： フィンランド 1、ロシア 1、韓国 2、台湾 2

身分別： 1 年本科生 6

<評価方法>

ビデオワークシート(10%)、クラス討論への参加(10%)、インタビュー・プロジェクト(30%)、ビデオ・プロジェクト(20%)、期末筆記試験¹⁾(30%)

4. インタビュー・プロジェクトの概要

筆者は、上級 2 AO の二つの柱のうちの一つであるインタビュー・プロジェクトにおいて、今回のような二つの目標を掲げた。まず、第一に「初対面の人にインタビューする」ということである。これは、上級 2 が学生たちにとって JLP で日本語を体系的に学べる最後のチャンスであ

り、今後社会に出てからは一成人として自分の力だけで日本語を使っていかなければならないこと、また、すでに秋学期、冬学期をICUで過ごしてきた学生たちにとって、同年代の友人と話すことはそれほど難しいことではないが、目上の人や初対面の日本人と適切な待遇表現を用いて会話することにはあまり慣れていないことを意識して設定した。第二に、「地球規模の問題について様々な角度から深く考えるためにインタビューする」ということである。各自が自分の興味に従って個別のテーマを設定することは、今後の大学生活の中で必要となる力であり、インタビューに取り組む上でのモチベーションにもつながると思うが、一方、一人15分程度の発表では内容が浅くなりがちであったり、聞き手側に発表を十分に理解できるだけの背景知識がないために、議論を発展させづらかったりするというマイナス面もある。また、小澤(2004)は、同じく春学期に担当した上級2「書き方・プレゼンテーション」のコース報告で、調査・発表プロジェクトにコース全体の統一テーマを設けたことについて、次のように述べている。

このテーマに決まるまでが実は一苦労だった。というのはコース開始直後に学生たちから「もう自分で自由にトピックを決める課題には取り組めない」という声が次々上がったからだ。本学に来てからの2学期間にどのコースでも各自が自由にテーマを決められるタイプの課題(レポート執筆、調査報告、スピーチなど)がいくつもあり、もうアイデアが出尽くしているというのである。(小澤2004, p.129)

こうした点を考慮し、コース初日のオリエンテーションで、受講者自身に各自独立したテーマで行うのと、コース全体で大きな一つのテーマを設定し、そのテーマについて様々な角度から深く考えるために、各自が小テーマを設けてインタビューを行うのとどちらがよいか意見を求めた。後者の場合は、ビデオの時間に予定している「ガイアの夜明け」というドキュメンタリー番組で取り上げられているフェア・トレード(以下FT)についてやってみたらどうかと筆者から提案を行った。FTについて書かれた新聞記事や筆者自身がFT商品として購入したパンケースなどを見せ、FTについて知っているかどうかを尋ねたところ、スウェーデンの学生が「スウェーデンでは当然のことだ」と答えたのに対し、ロシアの学生は「一応、聞いたことはある」、韓国、台湾からの学生は全く聞いたこともないと答え、くっきりとした対照が見られた。そうした事実にも興味を持った様子で、話し合いの結果、筆者の提案どおりコース全体でFTをテーマにインタビュー・プロジェクトを行うことになった。

そもそも筆者がFTを取り上げようと考えたのは、ビデオの時間に使用する素材を探す中で、テレビ東京が2004年12月14日に放映した「ガイアの夜明け——ファッションが貧困を救う」に出会ったからであった。この番組の中でFTは次のように説明されている。

フェアトレード。日本語に訳すと「公正貿易」。(中略)フェアトレードとは、発展途上国の生産者に適正な賃金を払い、貧困に苦しんでいる人たちをサポートする貿易です。これまで先進国は、途上国の人たちを安く働かせ、製品を安く買い、それを売って儲けるという貿易をしてきました。これを可能にしたのは、23倍にも上る先進国と途上国の

所得格差です。しかも途上国では劣悪な職場環境や不当な解雇など、多くの問題が発生しています。フェアトレードとは、途上国の労働力を安く買い叩かずに、よりよい仕事の場を提供しようという貿易です。

もともとコーヒー豆など農産物の世界で始まった FT を、より付加価値が高く、天候に左右されることが少ないファッションの世界に広げようとしているのが、日本に住むインド系イギリス人のサフィア・ミニー氏である。ミニー氏は日本語を自在に操り、東京の自由が丘に「ピープル・ツリー」という FT 商品の直営店を開くとともに、通信販売事業も展開している。学生たちと同じく外国籍の人が、日本で地球規模の問題に取り組む姿は、学生たちの共感を呼ぶのではないかと考えたのである。また、これから国際的な場で活躍していくであろう ICU の留学生たちが、現在はまだまだあまり知られていない FT について学ぶことは、学生自身にとって意味があるだけでなく、「ピープル・ツリー」など FT 事業を推進する側にとってもメリットとなるため、インタビューなどの協力が得やすいであろうこと、ICU には国際機関で働いた経験を持つ専門家が多く、そうした教員の協力を仰ぐことができれば、学生たちにとって ICU に留学したことの意義がますます高まると考えたことも、FT をテーマに選んだ大きな理由である。

具体的には、次のようなスケジュールでインタビュー・プロジェクトのための授業を行った。

4月15日	インタビュー・プロジェクトの説明と話し合い
4月18日・22日	「ガイアの夜明け——ファッションが貧困を救う」視聴
4月25日	ビデオの内容に基づいたディスカッション プロジェクトの方向性（インタビューで掘り下げたい内容、対象者、担当等）を決定
5月2日	各自の担当部分についてインタビュー計画書を提出 （提出後、授業外の時間を使って個別指導）
5月13日	ビジター・セッション 日本人学生を相手に、電話によるインタビューの依頼とアポイントの取り方、インタビューの仕方を練習
5月中旬～下旬	各自インタビューを実施し、結果を整理、分析、考察
6月初旬	授業外の時間を使って個別指導
6月6日	発表準備
6月10日・13日	発表とディスカッション

なお、評価は「内容・構成（7点）」「発音・アクセント・イントネーション（3点）」「文法・表現の適切さ（3点）」「アイコンタクトや資料の使い方などの発表の仕方（5点）」「流暢さ（3点）」「質疑応答の仕方（5点）」「司会者や聞き手としての貢献度（4点）」の計 30 点で採点した。

5. 各段階での活動の詳細

5. 1 ビデオ視聴とディスカッション

「ガイアの夜明け」は1時間弱の番組であり、2回に分けて視聴した。学生たちには事前に語彙表を配布し、わからない言葉については各自調べてくるよう指示した。授業はLL教室で行った。重要語句の確認をした後、各自がテープに録音しながら一度ビデオを視聴し、そのテープを聞きなおしながら各自のペースで筆者が作成したビデオワークシートに取り組んだ。FTの定義を説明している部分は、ディクテーションの課題も与え、学生たちが「FTとは何か」を言葉で説明できるように配慮した。全体でわかりにくかった部分を確認し、残りは次回の授業までの宿題とした。提出されたワークシートを見る限り、学生たちはほぼ正しく内容を理解できていた。

ビデオ視聴後のディスカッションでは、「FT以前と以後では発展途上国の人々が受け取る賃金はどの程度変わったのか。具体的には何割ぐらいが生産者の利益となるのか」「FTファッションはエスニックすぎて選択肢の幅が狭く、一般の消費者にはあまり広がらないのではないか」「FTがあまり知られていないのには、広報戦略にも問題があるのではないか」「南北問題は国家レベルで取り組む必要があり、このような個人レベルの取り組みはあまり効果がないのではないか」「発展途上国の人々はピープル・ツリーに依存してしまい、自分の力で問題を解決しようという意欲を失ってしまうのではないか」「FTは手織りなどの伝統産業にこだわるあまり、かえって発展途上国の近代化を妨げているのではないか」など活発に意見が出された。

5. 2 インタビュー計画書と個別指導

学生から出された上記のような疑問点を探るために、どのような小テーマを設定し、だれにどのような方法でインタビューを実施したらよいかについて全体で話し合った結果、以下の五つの小テーマが設定された。(a)～(d)までは1名ずつ、(e)は2名の学生が共同で行うことが決まった。

- (a) 「ピープル・ツリー」の店長に対するインタビュー
- (b) 「ピープル・ツリー」以外のFT店に対するインタビュー
- (c) 国際開発の専門家に対するインタビュー
- (d) FTがどの程度認知されているかを調べるための一般市民（ICUキャンパスおよび武蔵境周辺）に対するインタビュー
- (e) 世界フェアトレードデーに参加²⁾し、そこにいるスタッフ、来場者に対するインタビュー

これに基づき、学生たちは各自がその小テーマを選んだ理由、具体的な質問内容や予想される回答、それに対する対応などについて考え、計画書を作成した。その後、授業外の時間を使って個別指導を行い、計画書を見ながらそれぞれの計画を検討した。

各学生のテーマやインタビュー方法が絞られてきたので、個別指導をする傍ら、上記(a)(b)(c)に関しては、インタビューをお願いしたい方々に筆者が事前交渉を行った。インタビュー・プロジェクトのテーマをFTに決めた時点で、「ガイアの夜明け」に登場したピープル・ツリーに

は足を運び、店長と会って打診だけはしてあったが、改めて電話をかけ、具体的な内容を説明するとともに再度協力を依頼した。(b)については、渋谷と池袋に店舗を持つ「ぐらする一つ」というお店の社長兼店長に口頭および書面で依頼をした。(c)は、ICU 国際関係学科の高橋一生教授にメールでお願いしたところ、快くお引き受けいただいた。ただし、インタビューの具体的な日時や場所を決めることに関しては、これもこのプロジェクトで体験してほしいタスクの一つであるため、学生から直接電話かメールでご連絡を差し上げるという形を取った。

5. 3 ビジターセッション

実際にインタビューを実施する前に、ICU の日本人学生の協力を仰ぎ、ビジターセッションの時間を設けてシミュレーションを行った。ビジターセッションの前半はほかの活動を行ったため、後半の 30 分程度をインタビュー・プロジェクトのための練習に当てた。ビジターは6名で、学生と1対1のペアを組み、次のようなシミュレーションを行った。

- ①教師から紹介されたという設定で電話をかけ、インタビューの日時と場所を決定する。
- ②インタビューの当日、約束の場所を訪れ、挨拶をする。
- ③自分のテーマに従い、インタビューをする。
- ④お礼を述べる。

学生によっては、アポイントを取る必要のないインタビューの方法を採択した者(5. 2の(d)「一般市民へのインタビュー」、(e)「世界フェアトレードデー参加者へのインタビュー」)もあるが、前述のとおり、このような場面は社会に出れば必ずといっていいほど遭遇するものであり、全員に体験しておいてほしいと考えたため、全員この課題に取り組んでもらった³⁾。その後、ビジターから言葉の使い方や質問内容についてフィードバックをしてもらった。インタビューの内容によってはビジターでは答えられない質問もあるため、その場合には質問の仕方や質問項目の適切さなどについてビジターに意見を言うってもらう形にした。

ビジターセッション後にビジター、学生双方に記入してもらったアンケートを見ると、両者ともほとんどが敬語についてのコメントだった。これには、ビジターセッションの前半部で、ビデオの時間に視聴したNHKクローズアップ現代「乱れた敬語がまかり通る」を題材にディスカッションを行ったことも影響しているかもしれない。ビジターから学生たちへのフィードバックでも直接敬語の使い方について厳しいコメントが与えられたらしく、学生たちは自分がいかに敬語が使えないかを痛感し、かえって不安になってしまったようであった。特に、知らない相手に電話をかけることの難しさを指摘した学生もいた。

次のクラスで、このビジターセッションのフィードバックを行った際には、学生たちの不安を軽減するため、本番ではビジターセッションと違い、相手は言葉の使い方よりも話の内容に注意を向けるため、それほど神経質になる必要はないこと、敬語そのものよりもむしろ音調やスピード、表情、態度などによって丁寧さは伝わるものであることを強調した。この後、学生たちはそれぞれ自分の計画に従い、実際のインタビューに臨んだ。

5. 4 インタビューの実施と個別指導

世界フェアトレードデーのイベントは、筆者自身も見ておく必要を感じたため、そこでのインタビューを計画していた学生2名とともに、5月14日、東京都港区にある「女性と仕事の未来館」で開催されたイベントに参加した。このイベントは、「ガイアの夜明け」に登場したサフィア・ミニー氏が経営するグローバル・ヴィレッジ／フェアトレードカンパニー株式会社が主催するもので、日本国内の世界フェアトレードデー関連のイベントとしては最大規模のものであるということであった。しかし、会場に着いてみると想像していたよりはるかに小規模な催しで、ホールでシンポジウムが行われているほかは、数店のFTショップが出店しているだけであり、そこにいる関係者も積極的に広報活動を行っているという様子ではなく、インタビューをしようとしても「忙しい」の一言で拒絶されてしまうことが多かった。そのため、作戦の練り直しが必要となり、店のスタッフではなく、会場で唯一積極的に広報活動を行っていたFT学生ネットワークの学生たちに対するインタビューおよび来場者へのインタビューを行うこととした。初めは初対面の人に話しかけることをためらっていた学生たちも、次第に慣れてきたのか、最後には帰りがけのエレベーターの前でも進んで声をかけるまでになっていた。筆者は少し離れたところからその様子を伺っていたが、一つ興味深い出来事があったので、それを記しておきたい。初対面の人にインタビューをお願いする際のコツとして、筆者は学生たちに「怪しい人だと思われないように、大学名と留学生であること、これは大学の課題であることを最初に告げるように」とアドバイスしていた。ところが、ある老婦人は学生が「国際基督教大学」という大学名を告げた途端、「私は浄土真宗ですから」と言って逃げるように去って行ってしまった。初めはきよとんとしていた学生も、やがて大学名の「基督教」が思わぬ誤解を招いたのだということに気づき、大笑いをするという一場面があった。その後は「ICUの留学生」と言い方を改めていたが、今後の指導の際に留意すべき点であると感じた。

ほかの学生のインタビューに関しては、筆者が同行することはなく、各自が自分のスケジュールに従ってインタビューを実施し、それが終わった時点で発表のための個人指導を行った。概ねスケジュールどおり順調に進んだようであるが、ピープル・ツリー以外のFT店の社長へのインタビューを計画していた学生だけは、発表日直前まで社長とうまく連絡を取ることができず、インタビュー実施が危ぶまれた。筆者が事前にこのプロジェクトの意図を説明し、協力を要請した時点では好意的な返事をいただいていたため、筆者自身少し楽観視し過ぎてしまい、学生の進捗状況のチェックが甘くなってしまうことは否めない。最終的には学生に筆者の研究室から直接その会社に電話をかけさせ、ようやく社長と直接話をすることができた。社員数名の小さな会社であるため、社長自身が仕入れ、販売から広報まで何役もこなしており、学生によるとその電話の最中も相当慌ただしい様子だったということであった。このため、対面でのインタビューはあきらめ、メールによる質問への回答という形で何とか発表日までにインタビューを実施することができた。

5. 5 発表

6月10日、13日の二日間にわたって、一人15分（発表10分、質疑応答5分）の発表を行っ

た。発表が当たっていない学生に司会進行役を担当させ、自分の発表以外は学生にも評価表を書かせた。6名中4名がパワーポイントを使用し、残り2名の学生も板書や写真などの視覚物を用いて発表を行った。当日の様子は学生に許可を取った上でビデオに収めた。

5. 6 評価

評価は、前述のとおり「内容・構成（7点）」「発音・アクセント・イントネーション（3点）」「文法・表現の適切さ（3点）」「アイコンタクトや資料の使い方などの発表の仕方（5点）」「流暢さ（3点）」「質疑応答の仕方（5点）」「司会者や聞き手としての貢献度（4点）」の計30点で、録画したビデオを見ながら筆者が採点した。その結果、A評価が2名、B評価が3名、C評価が1名であった。学生には、コメントを添えた筆者の評価表ならびに発表を聞いていた学生たちがつけた評価表を後日渡した。

6. 実施後のアンケートの分析

発表終了後に学生に記述式のアンケートを実施した。それによると、学生たちは総じて達成感、充実感を味わうことができたようである⁴⁾。以下、「個別のテーマではなくクラス全体で一つのテーマに取り組んだことについてどう思うか」および「インタビュー・プロジェクトを通じて最も学んだことは何か。また、この経験が今後の生活や日本語の学習にとってどのような役に立つと思うか」という2点に絞って、学生たちのコメントを紹介する。

まず、第一の点については、6名中5名が肯定的に捉えていた。1名は、一人ずつ違うテーマを決めるほうが、「自分のテーマ」という感じがしてよいと答えていたが、ほかの5名に関しては、「色々な視点から見られるので、FTについてより深く知ることができた」「みんなで一緒に考えると、自分では気づけなかった観点ができて、新しいことが習える」「クラス全体が基本的なことが分かっていると、発表もしやすくなる」といったコメントを寄せていた。いずれにせよ、今回のようなやり方は6名全員にとって初めてだったらしく、新鮮に感じたということであった。

次に、今回のインタビュー・プロジェクトから学生たちが学んだことについて述べる。統一テーマを肯定的に捉えていた5名全員が、今後の自分の生活や日本語の学習にとって非常に役に立ったと答えている。まず、知らない人に連絡してアポイントを取ったり、初対面の人にインタビューをしたりした経験は、学生たちにとって初めての経験であり、実施前の不安が大きかった分だけ、それを成し遂げたという達成感が自信につながったようである。「大変だったけど楽しかった」「全体的に面白かった」「最初に不安があったのは当たり前なことだと思う。でも、実際のインタビューは思ったよりうまくできた」「発表は失敗したけど、先生にありがとうございましたと言いたい。今、前より少し自信がある」などのコメントが見られた。さらに、言語面以外で学んだこととして、「それまで聞いたこともなかったFTという概念」が挙げられていた。中には、「これまで買い物をするときは値段が安いほうを選んでいたが、生産者のことも考えるようになった。今まで私たちが安さを追求してきたことによって、私たちも生産者たちに対して加害者になっていたのではないか。私たちは普段の生活の中で知らないうちに不公平なことに慣れてしまった。しかし、今、そういう不公平に対する対策を考えなくてはならない。それはわれわれのこれから

の課題だ」と書いた学生もいた。これこそ、筆者が目指したかった「地球市民」への「自己変容」につながる「気づき」であり、その目標はこのコメントを見る限り達成されたとと言えると思う。

一方、「少ししか勉強にならなかった」と答えた学生1名は、日本におけるFTの認知度を調べるためにICUキャンパスおよび武蔵境周辺で街頭インタビューを行った学生であった。本人も「もし、もう一度インタビュー・プロジェクトをするとしたら、どんな点を改善したいか」という質問に対し、「もっと色々な質問を準備する」と答えているが、計画書の段階からインタビュー対象者や質問項目数が少なく、興味深いデータを集めるには不十分であると筆者から指摘されていた。実際のインタビューでは多少改善が見られ、自国のFTに関する世論調査と比較しながら発表したの、発表自体はそれなりに興味深いものであったが、インタビューした相手が初対面とはいえ若い女性ばかりであるなど、ほかの学生が取り組んだ課題に比べると、チャレンジングな内容ではなく、達成感も低かったであろうことは想像できる。この学生は、「一人ずつ違うテーマを決めたほうがよかった」と答えた学生であり、そもそもテーマ決定の方法に不満を感じていたことが、その後の取り組みにも影響したのかもしれない⁵⁾。また、この学生はスウェーデン出身の学生であり、4で述べたとおりFTについてすでに知っていたことも、テーマへの興味を削ぐ原因になった可能性がある。さらに、この学生は一般の日本人にインタビューすることを「迷惑をかけること」だと考えていたことが実施後のアンケートからわかった。自分たちが日本語を学ぶためにほかの人に迷惑をかけるべきではないとコメントしている。この点に関しては、インタビューされることで日本人の側にも新たな発見や学びがあり、インターアクションを通じて双方にメリットがあるのだということ、また、そうなるようなインタビューを計画すべきであることを、最初の段階できちんと説明しておく必要があったと思う。こうしたインタビュー・プロジェクトに対する否定的な感情が、この学生のモチベーションおよび達成感に深く関わっているものと思われる。ただ、この学生も、「色々な人から話を聞いたことで人によって様々な意見があることがわかり、以前より価値観の多様性について考えるようになったかもしれない」とコメントしており、少なくとも多様な文化を肯定的に受け入れるという「地球市民」に必要な素養に関わる学びはあったものと考えられる。

7. この実践が示唆することと今後の課題

以上、本稿では「地球市民教育」を目指す日本語教育実践の試みとして上級2AOのコースで行ったインタビュー・プロジェクトについて紹介してきた。最後に、この実践が示唆することと今後の課題について論じたい。

まず、このインタビュー・プロジェクトを計画する上で筆者が立てた二つの目標が妥当であったか、またどの程度達成されたのかについて検証する。第一の目標「初対面の人にインタビューする」は、上級2が学生たちにとってJLPで日本語を体系的に学べる最後のチャンスであることを考え、これまでの日本語学習の総決算の意味から高いハードルを設定したのであるが、「初対面である」というだけでは十分にその目的を達成し得ないことがわかった。街頭インタビューは、全く「初対面」の相手であり、ある意味では非常に難しいものではあるが、対象者をどのように設定するかによっては、あまり待遇表現を意識しないで済んでしまう可能性がある。今回、FT

の認知度を調べた学生は、テーマがファッションだからという理由で若い女性ばかりをインタビューした。しかも、統計的に結果を分析する必要があったため、必然的に同じような質問を繰り返すこととなり、「日本語学習の総決算」としては不十分な内容となってしまった。そもそも統計的な調査を個人が短期間に行うには限界があり、筆者のこれまでの経験でも、「日本語の練習になればそれでいい」と妥協して授業に取り入れているケースが多い。こうしたことを考えると、単に「教室外で一般の日本人と日本語で話をするチャンスを増やせばいい」というわけではないこのレベルの学生にとって、街頭インタビューは適当な手法ではないといえる。テーマの関係上、日本における FT の認知度を調べるということは意味のあることではあったが、やはりそれに加えて「じっくり一人の人に話を聞く」というインタビューを体験させるべきであったと思う。細川（2002）は、総合活動型学習として行っている「レポートを書く」という実践の中で学生たちに課しているインタビューについて、「決まった質問を繰り返すインタビューではなく、自由会話の形で、少人数（場合によっては一人だけ）の人からゆっくり話をきくのが効果的」（p.168）であるとしている。そして、学生自身が一斉インタビューやアンケートをしたいと申し出る場合もあるが、そうした取材からは「日本とは……」「日本人とは……」といったステレオタイプを生むレポートが多くなってしまい、既成の価値観にとらわれず、従来の思い込みや先入観を修正し、自己変容を促す同実践の趣旨に適さないため、避けるように指導すると述べている。また、学生たちにはインタビューの方法を次のように説明していると書かれている。

- ① 対象は一人でもいいから、じっくりゆっくり行う。
- ② 質問する内容はあらかじめ準備しておく。
- ③ 質問ばかりでなく、自分の考えも言う。
- ④ いきなり答えを求めるのではなく、日常のことから入って、どうやったら質問の方向へ話を持っていけるか考える。
- ⑤ メモをとる（できるだけ日本語で）（細川 2002, p.168）

筆者の今回の実践も、学生たちが地球市民として自己変容していくきっかけとなることを目指して行ったものであった。自己変容はお互いの考えや価値観がぶつかり合って初めて可能になる。そのことを考えれば、やはり「じっくり一人の人に話を聞く」タイプのインタビューを課す必要があったであろう。テーマの関係でどうしても街頭インタビューが必要な場合は、例えば、FT の認知度を調べる街頭インタビューはクラス全員で手分けをし、それに加えて各自が「じっくり一人の人に話を聞く」タイプのインタビューを行うというようにしておけば、街頭インタビューのデータ数が増えて統計の意義も高まる上、全員がインタビューを通じて自己を見つめなおす機会を持つことができたかもしれない。

第二の目標「地球規模の問題について様々な角度から深く考えるためにインタビューする」という点については、そのためにコース全体で一つの統一テーマを設定することとしたが、それに対して否定的なコメントをした学生が1名いた。しかし、残り5名の学生はそのメリットを実感しており、筆者はなお地球規模の問題について考えを深めるためには、やはり統一テーマで様々な視点から深く掘り下げることが妥当であったと考えている。ただ、こうした否定的な意見が生まれないようにするための工夫も必要であろう。

第一に、テーマの設定にもう少し多くの時間を割くということである。今回は統一テーマの例として教師側から FT しか提示しなかったが、同様に地球規模で考えるべき問題を複数用意し、その中から学生たちが話し合いによって統一テーマを決めるという形が望ましいと思う。それでも自分の希望したテーマと違ってしまふ可能性もあるが、少なくとも自分たちで選んだという実感は持つことができるだろう。実際、筆者が担当した上級2のもう一つのコース、「読解・討論」では、読解とディベートを組み合わせて行う活動を実施した⁶⁾が、そのテーマは筆者があらかじめ用意した六つの中から学生たちに二つを選んでもらった。自分の希望したテーマにならなかった学生もいたが、全員納得し、特にそのことによる不都合やモチベーションの低下は見られなかった。ただ、インタビュー・プロジェクトのように、ほぼコース全期間を通して取り組むテーマで、受講生の数だけ小テーマが見つけれられ、インタビューに適切な対象者も存在し、なおかつビデオもそろっているものを探すということになると、なかなか容易なことではない。環境問題や民族紛争など地球規模で取り組むべき課題は多数存在するが、それを自分自身の問題としてひきつけることができなければ表面的な知識の注入になってしまい、自己変容をもたらすようなインパクトは持ち得ないであろう。今回は FT についてほとんどの学生が聞いたことすらなかったこと、また自分たちが普段何気なく行っている「買い物」が、南北問題にも通じる深い意味を持ち得るのだという発見が、学生たちの新鮮な興味をひきつけかけになったものと思われる。しかし、このようなテーマを見つけることは一朝一夕でできることではない。教師自身も「地球市民」となるべく日ごろからアンテナを張り、こうした問題にどれだけ意識的になれるかが求められているのかもしれない。

第二に、インタビューがインタビューを受ける日本人側にもメリットがあるのだということをきちんと説明しておく必要がある。インタビュー・プロジェクトを「日本語の練習のために日本人を利用している」「自分の下手な日本語につき合わせるのには申し訳ない」といった発想で捉えている学生がいたことは、残念ながら筆者が目指そうとした「人間主義の日本語教育」の意図がこの学生に十分に伝わっていなかったと認めざるを得ない。日本人も地球市民の一員である以上、国や民族を超えて共に地球をよりよい環境へと改善していく責任を共有しているはずである。インタビューを通じて自己変容を遂げるのは留学生の側だけではないのである。そのことを理解すれば、学生たちの意識や取り組み姿勢にも変化が見られるのではないだろうか。しかし、こうした発想は、これまで「日本語教育」イコール「言葉の学習」と思ってきた人々にとってはなかなかなじみにくいものかもしれない。そうした学生に対し、明確な根拠を持ってこの活動の意義を納得してもらうためにも、今後は学生たちだけでなく、インタビュー対象者に対しても実施後の聞き取り調査を行い、日本人側にはどのような発見や学びがあったのかを明らかにしていくという研究も必要であろう。また、インタビューの際に生じたコミュニケーション上の問題点などについても尋ねることにより、こうした活動で学生たちがどのような困難に直面するのかを明らかにし、今後の指導に役立てていくこともできる。今回は実施することができなかったが、今後の課題として取り組んでいきたい。さらに、時間的な制約という課題はあるが、プロジェクトの成果をインターネット上で公開するなどの活動を取り入れれば、調べた内容をわかりやすくまとめる練習になるだけでなく、FT や FT 店を紹介することにもなり、より具体的かつ目に見え

る形でインタビューされる側にもメリットがあることを実感してもらえるものと思われる。

第三に、上述のとおり街頭インタビューを避け、「じっくり一人の人に話を聞く」タイプのインタビューに変えることも、統一テーマを設定する場合の問題点を軽減する効果があるように思う。たとえ最初はあまり興味がなかったテーマであっても、インタビューの対象者とじっくり向き合い、お互いの価値観をぶつけ合うことで新たな発見が生まれ、テーマに対する興味が喚起される可能性がある。また、一人の人に集中することにより待遇表現への意識も高まり、言語面においても「初対面の人とじっくり話し合うことができた」という達成感が得られるであろう。

以上のような工夫によって、今回見られた問題点を改善し、「地球市民教育」としての日本語教育の可能性を今後もさぐっていききたい。

最後に、実践の過程で感じた問題点についても記しておきたい。今回のプロジェクトでは、学生たちに文献等で資料を集めることは特に要求しなかった。それは、このコースが「話し方・聴解」の力を養成するためのもので、読解のコースではないこと、週に2コマ、2単位のコースで、しかもこのコースのもう一本の柱である「専門的な番組を見て理解できるようになる」という目標を達成するために、学生たちにはすでに、クラスで視聴するビデオの語彙の学習、ビデオワークシートなど毎回大量の課題が与えられていることなどを考慮したためである。しかし、インタビューや発表の質を高めるためにも、学術的な調査発表の方法を学ぶためにも⁷⁾、テーマについてより深く理解するためにも、文献等の調査は欠かせないものであると考える。総合的な活動を行いたい場合に直面する、スキルに焦点を当てたコース編成のマイナス面といえよう。また、時間的な制約から、インタビューに答えてくださった方々に、学生本人からお礼状を出させるということもきちんと指導することができなかった。口頭で書くように勧めはしたが、このような形式のお礼状は書いた経験がない学生が多いと思われるので、やはりプロジェクトの活動の一つとして授業に組み込む必要があった。社会に出れば当然の礼儀であり、今後の社会生活の上で役に立つ経験になったはずである。前述のホームページ作成とも合わせ、時間およびコース目標の制約とどのように折り合いをつけ、調整していくか、この点も今後の課題である。

注

- 1) 期末筆記試験は、クラス内で見たビデオの中から2本と、初めて見るビデオ1本を視聴し、問題に答える形式で行った。初見のビデオに関しては、テープに録音し、時間内であれば何度でも聞きなおしてよいこととした。どちらの場合も語彙表は与えないが、初見のビデオのみ辞書の使用を認めた。
- 2) 毎年5月の第2土曜日は、F Tの普及を目指す世界中の組織が一斉にF Tをアピールする「世界フェアトレードデー」に指定されている。1996年にヨーロッパのF Tショップが連携してキャンペーンを行ったことが発端となり、1999年には日本でも各地でイベントが開催されるようになった。

(『ピープル・ツリー2005 夏増刊号』より)

- 3) ただし、(d) (e) のケースについても、ビクターセッションの前のクラスで扱った。
- 4) 初め学生たちは発表をビデオに撮られることを恥ずかしがっていたが、ある学生は後日、自分の日本留学の成果として国の家族に見せたいからと言って、このビデオのダビングを依頼してきた。このことから、学生たちが達成感、充実感を感じていたことが窺える。

- 5) しかし、コース初日にインタビュー・プロジェクトのやり方について学生たちと話し合った時点では、この学生が真っ先に賛成の意を表明していた。教師の意図を汲んで自分の意思とは違うことを答えた可能性もあり、学生の真意を引き出すことの難しさを感じた。
- 6) このコースでは、中央公論社『日本の論点』を読解教材にすることがあるが、読みに目的をもたせ、ディスカッションを活発化させるために、一つの論点に対して複数の専門家が意見を述べているという本書の特色を生かし、それをディバートの資料として利用するという試みを行った。この実践については、また稿を改めて報告したい。
- 7) 上級2の3コース全体で考えれば、「書き方・プレゼンテーション」のコースで、調査発表およびそれを論文にまとめる方法を学ぶのであるが、全ての学生が3コース全てを受講するわけではない。

参考文献

- 池田香代子再話・C. ダグラス・ラミス対訳 (2001) 『世界がもし 100 人の村だったら』 マガジンハウス
- 岡崎洋三・西口光一・山田泉 (2003) 『人間主義の日本語教育』 凡人社
- 小澤伊久美 (2004) 「上級2 書き方・プレゼンテーション」コース報告 『ICU 日本語教育研究センター紀要 13』 121-135
- 黒川美紀子 (2003) 「海外の日本語教育におけるリソースの活用とインタビュー活動の可能性」 『BATJ Journal』 No.4 英国日本語教育学会 40-49
- 佐々木薫・田口典子・赤木浩文・安藤節子 (2001) 『トピックによる日本語総合演習 —— テーマ探しから発表へ』 スリーエーネットワーク
- 佐藤慎司 (2005) 「クリティカルペタゴジーと日本語教育」 『リテラシーズ1』 くろしお出版 95-102
- 中村一郎・坪根由香里 (2004) 「日本語教育報告 —— この10年 —— 上級日本語 Advanced Japanese 1-2」 『ICU 日本語教育研究センター紀要 13』 58-70
- 野元弘幸 (2001) 「フレイレ的教育学の視点」 青木直子・尾崎明人・土岐哲編 『日本語教育学を学ぶ人のために』 世界思想社 91-104
- フレイレ, P (1979) 『被抑圧者の教育学』 小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周訳 [Freire, P.(1974) *Pedagogia do Oprimido*, Rio de Janeiro: Paz e Terra.]
- 藤原雅憲・初山洋介 (1997) 『上級日本語教育の方法』 凡人社
- 細川英雄 (2002) 「総合的な言語活動とその学習」 縫部義憲編著 『多文化共生時代の日本語教育』 161-174
- ミニー, S (2005) 『ピープル・ツリー2005 夏増刊号』 フェアトレードカンパニー株式会社/グローバルヴィレッジ
- 山下早代子・小川小百合 (1994) 『日本人の価値観発見インタビュープロジェクト』 くろしお出版
- 山田泉 (2003) 「人間主義の日本語教育を考える視点」 岡崎洋三・西口光一・山田泉編著 『人間主義の日本語教育』 凡人社 9-43